

敗戦
特集

早野 慎吾

映画『いのちの岐路に立つ・核を抱きしめたニッポン国』がつなぐ 反核平和への思い

テーマに、国際会議では各国の参加者から多くの発言がなされ、ヒロシマデー集会には約2000人の参加者が集まつた。

筆者の取材に、担当常任理事の

今年7月に国連で採択された核兵

器禁止条約には「ヒバクシャ」との文言が入れられた。ヒロシマ・

ナガサキ・ビキニ・フクシマを経験した日本。その歴史を描いたド

キュメンタリー映画『いのちの岐路に立つ・核を抱きしめたニッポン国』が完成し、原水爆禁止世界大会に合わせて広島で上映された。世界大会の様子とともにレポートする。

拳で、条約前文に「ヒバクシャ」との文言が書かれていた意義も大きい。この条約採択により、今年の原水爆禁止世界大会は特別なものとなつた。

原水爆禁止日本協議会(原水協)主催の世界大会が、8月3日~6日まで広島で開催された。「核兵器禁止条約を力に、核兵器のない平和で公正な世界の実現」を大会

原水爆禁止世界大会

前川史郎さんは「今回は、核兵器禁止条約が採択された直後の大会として意義が大きい。核廃絶の大さな一步となつた」と話した。参加者の大平由美子さん(新日本婦人の会)は「条約採択で、広島市民にも光が見えた。残念なのは日本が条約交渉に不参加だったこと」と答えた。

一方、原水爆禁止日本国民會議(原水禁)主催の世界大会・広島

過去・現在・未来まで続く印象的だった。

どちらの世界大会も「平和」「核廃絶」を強く願う気持ちは同じだ。イデオロギーを越えて参加してほしい。

原水爆禁止世界大会に参加するために乗った広島行きの新幹線で、偶然、墨田折鶴会の湊武さんと乗り合わせた。湊さんは、3歳の時に広島で爆心地から約2・2キロメートルの地点で被爆した。約4時間、湊さんから被爆者の思いを聞くことができ、退屈なはずの乗車時間が、貴重な時間に変わつた。

7月7日、国連で核兵器禁止条約が採択され、被爆者の念願の一つが実を結んだ。まさに歴史的快

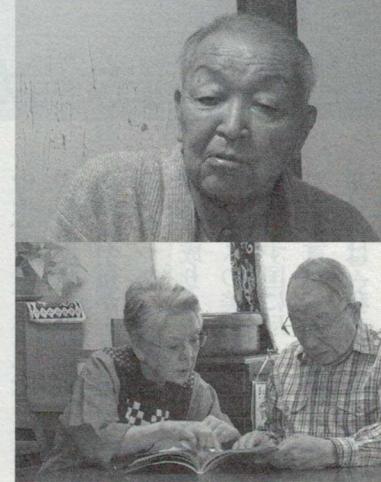


大会は8月4日から6日に開かれ、「核も戦争もない平和な21世紀に!」「くり返すな原発震災! めざそう脱原発社会!」をメイン・スローガンに、「子どもたちに核のない未来を!」など九つのサブ・スローガンを掲げ、核兵器禁止条約や脱原発などについて議論がなされた。

開会総会に参加した近藤一郎さんは(広島県)は、「例年より空席が多いことが多かったことが気にかかつた一方、若い参加者が多く、核廃絶への関心が世代を超えて引き継がれていることを強く感じた」と話した。確かに、多くの若者が大会Tシャツを着て総会に参加する姿は印象的だった。

原水禁世界大会の「ひろば・フィールドワーク」のセクションでは矢間秀次郎さん製作・脚本の反原発映画『シロウオ原発立地を断念させた町』も上映され、会場は満員となつた。この『シロウオ』に続き矢間さ

『いのちの岐路に立つ～核を抱きしめたニッポン国』



©映画「原発黒書」製作委員会

脚本・製作：矢間秀次郎 監督：原村政樹 2017年／日本／110分

9月9日＝東京・たんぽぽ舎、9月23日～10月6日＝大阪・シアターセブンにて上映予定。

予見された原発事故

原作の冒頭で、広島で被爆したユメンタリー映画『いのちの岐路に立つ～核を抱きしめたニッポン』が完成した。監督は、反戦詩人の木村迪夫さんにスポットを当てた『無音の叫び声』を監督した原村政樹さん。ナレーターは、反

登場人物それぞれの人生を横軸にした作品を構築した。さらに過去の歴史を紐解くばかりでなく、現在進行している現実をしつかり描くことに力点を置いた」と話す。

原村監督は「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマという歴史の流れの時間軸を縦軸にしつつ、

原作の冒頭で、広島で被爆した堀江壯さんが平和公園内で詩碑に刻まれた「にんげんをかえせ」(峰三吉『原爆詩集』序)を読み上げる。映画のテーマが明確に伝わる場面だ。原爆投下後、死者を家庭に集めて燃やしたが、燃料不足

で完全に燃やせず、1カ月間、魚の腐ったような臭いが立ち込めた。それが、いまだに忘れられないと堀江さんは語る。

長崎で被爆した西岡洋さんは、学生時代、画家の丸木位里・俊夫(司令部)によりプレスコードが発せられ、GHQ批判や原爆に関する記事・写真が禁止された。占領後期では、個人の手紙にまで検閲の手が回った。写真は禁止されたが、絵画は禁止されなかつたため、丸木夫妻は、報道も出版もできなかつた32年間、絵を書き続けたのだ。現在『原爆の図』は埼玉県の丸木美術館に展示されている。

戦後、日本は、原爆は反対だが原発は推進する方向に向かう。政府は、「原発は安全だ」という間違った考えを広め、そのことばを信じた「市民もメディアも政治家も大半が原子力発電所に明るい未

28ページの写真撮影／早野慎吾
はやの しんご・都留文科大学教授。

京大学原子核研究所教授)は解説する。だが、藤本さんが監修した『原発黒書』(1976年、原水禁刊)は、40年も前に「原発は安全でクリーンなエネルギー」がまやかしてあることを科学的に分析し報告していた。実際、福島原発事故は同書が指摘した通りに起きていた。当時、この報告書を重要視していれば、福島原発事故は防げたのではないかとも思える内容だ。

原発労働者たちを追い続け、写真で原発被曝を訴え続けている写真家の樋口健一さんは、あまり知られていない原発被曝労働者の実態を明確に伝えている。

映画の最後は、広島で被爆した関千枝子さんが「安らかに眠れません」核兵器廃絶の日まで 全原発廃炉の日まで」と記した灯籠を元安川に流す場面で終わる。政府に対する強烈なメッセージだ。墨田折鶴会の湊さんは、新幹線の中で「自分の子だけでなく、孫が産まれるときも被爆の影響が出ないか心配でたまらなかつた」とも話していた。ヒバクシャ自らの命だけでなく、その子孫の命まで不安を残す核。その恐ろしさを正確に次世代に伝える必要がある。